

シンポジウム里山報告書

立ち止まってみよう

ふるさとが見えてくる

シンポジウム

里山



文化庁、京都府、京都府教育委員会、綾部市、綾部市教育委員会、
第 26 回国民文化祭京都府実行委員会、第 26 回国民文化祭綾部市実行委員会

竹市 続きまして、トレーシー・グラスさんのご紹介に移りたいと思います。トレーシーさんは、カナダのトロントご出身であります。トロントといいますと、カナダの最大の国際都市、大変な大都会でして、トレーシーさんはそこに生まれ育ったんですが、実は大変うらやましいんですが、ご自分の馬をお持ちで近くの牧場に預けていたので、週末になるとその馬にまたがって野原を駆け巡ったという、テレビドラマのような少女時代を送られた。そしてアメリカの大学に進んで文化人類学を専攻された関係で、東洋の哲学、美術、宗教に興味・関心を持たれて、まず奈良の禅寺で修行されたと？



陶芸家

トレーシー・グラス

不便さがあっての良さ、不便なほど人がいなくて落ち着いて仕事ができる。

トレーシー 曹洞宗のお寺で座禅を学びました。仏教にあこがれて日本に来たんです。

竹市 さらにその後、陶芸を勉強されたということで、外国にも陶芸はあると思うんですが、日本の陶芸に興味を持たれたというのは何かやっぱりあったんでしょうか。

トレーシー そうですね。具体的にいえば備前焼。ゼロから土から大地から物を作れるということで、さらに火を使って作り上げていく。そこに魅かれたんですよ。でも現在手がけているのは備前焼とかではなくて、個人的な手法になっています。

竹市 それから、もうひとつユニークなのが世界一周旅行。その後も機会があれば外国へ行っていろんな町をご覧になっておられるので、この後、パネルディスカッションでもその辺の文化比較をお話が聞けるとと思います。そして世界一周旅行から戻った後、日本でアメリカの大学卒業資格を取るという仕組みがあるので、それを利用して卒業された後、日本に腰を落ち着けて陶芸作家活動をするということで、その場所を選ぶのにいろいろ回られたということですが……。

トレーシー そうですね。陶芸の先生は九州でしたけれど、お客さんは京阪神に多いので、京

阪神を中心にして拠点探しをした結果、素晴らしい自然に恵まれた地を見つけたのがここ上林、22年前のことです。

竹市 奥上林に決めたポイントは何でしょうか？

トレーシー 基調講演で高木美保さんも話しておられた、田園風景の自然の良さ、空気、川が流れて、萱葺きの建物があふれていて……今は残念ながらトタンばかりかぶせてあるんですけど、まあそういう、他の地域では見られない風景に、不便さがあっての良さ、不便なほど人がいなくて落ち着いて仕事ができる、という点があります。それからもう一つは、綾部の皆さんの情というか綾部の情に乗せられて、奥上林に家を建ててしまったんです。良い古民家が見つからなかったもので。

竹市 では実際にどんな作品を作っておられるか、写真でご紹介してまいります。まず、トレーシーさんは薪窯にこだわっておられるということですが……。

トレーシー 本当に焚いてる気分にもなりますし、作品の仕上がりという観点から言えば、不安定を狙うというか、変形や偶然さを狙うというか、オリジナルなものができるので、ものすごく刺激があるんです。



石、それに発色のために銅や鉄などを混ぜて灰釉薬を作ります。材料となる粘土もそうですけれど、すべて材料は自分で作ります、土作りから全部。そのあたりで、やっぱり綾部の皆さんの、無農薬にこだわるとか農業をやっておられる人たちと通じるところがあると思うんです。粘土にしても釉薬にしても、例えば材料屋さんに注文すると、何が入っているかわからないので、それだったら自分の手で、天然の材料を使って準備したい。木灰に関しても、自分の薪ストーブで焚いて作るから一石二鳥みたいなもんです。昔であれば、工事をしているのを見かけたら、担当の建設会社に一升瓶持って行って、「ちょっと分けてもらえませんか」みたいな感じで木を分けてもらいました。おかげさんで、上林の桜とか上林の檜とか、産地のはっきりした木が手に入りました。本当はやってはいけないことなんでしょうけど。

竹市 ガス窯とか電気窯とかのほうが温度調節や管理が簡単で、安定したものが作れるけれども、あえてそうじゃなくて自然の造形・変化を楽しんでいるんですね。

トレーシー やっぱり炎に魅かれての仕事という側面がありますね。子どもたちのキャンプファイアーでも、集まるとしゃべりながらみなさん目が炎の方を見てしまうじゃないですか。それと同じです。これは徹夜した後みたいな顔になっていますけど、ごめんなさい。この作品は、去年、賞をいただいたんです。新匠工芸会といって、65年くらい続いている工芸会で。



竹市 もうひとつ、トレーシーさんの作品の特徴は、灰釉薬にあると思うんですが、この写真にある壺に「クリ」「ナラ」「ケヤキ」などと書かれているんですが……

トレーシー それぞれに、ナラ、ツバキ、クリなどの木灰が入っています。それらの木灰と長



竹市 では、実際に灰釉薬がどんな仕上がりになるのか説明していただけますか。

トレーシー これは窯出しの後の写真なのですが、最近は釉薬を削って釉薬の少し下の層が見える状態……きれいなものを少し汚くすることで裏に出てくるものを見せる技法を模索しています。釉薬の下には、目に見えない素晴らしさ……宇宙があるんです。



竹市 こちらの写真が、トレーシーさんの自宅の敷地内にあるギャラリーですね。やはり「綾部市特産品抽選会」において、トレーシーさんの作品……先ほどの受賞作とか大作は無理ですけど、お持ち帰りいただけるような作品が用意されていますので、お楽しみに。

仕上がりこだわることから、釉薬も粘土も、すべて材料から自分で調達します。

里山って何だろう

竹市 中川さん、どうもありがとうございます。

さて、本日のシンポジウムのテーマは「里山」ということなんですけれども、ここで「里山」という言葉について、簡単に振り返ってみようと思います。

こちらに簡単にまとめてみましたが、「里山」という言葉を最初に使ったという、記録に残っていることころでは、どうも江戸時代に、尾張藩の木曾材木方というお役人の記録帳みたいなものに「村里家居近き山を指して里山と申し候」と、そんな記述があるようでございます。そして「里山」という言葉が普及したきっかけとしては、よく知られております、京都大学の名誉教授であられます四手井綱英先生が「林学でよく用いられる農用林のことを里山と呼ぼう」と提案したことにあるようです。また、そうした学術的な定義とは別に、地域によっては昔から、人が暮らす里山と一般の人が立ち入らない奥山、そうした区分がなんとなく田舎のほうにはあったようでございます。奥山というところは、普通の一般の人は入らない冒してはならない、せいぜい山伏や修験者が入るところだ、そんなイメージがあったようにも聞いております。

以上は一般的な概念ですので、今から、パネリストの皆さんご自身のご意見を伺いたいと思います。

それでは井上さん、井上さんにとって里山とはどんなものなんでしょうか。

井上 そうですね、いまさら「里山とは」といわれてもね、困りますが。特に意識したことはないんですけども、とにかく、イノシシ、鹿、熊、あいつらの故郷でしょうね。そういうイメージしかなくて、山見ても「どこにイノシシがおるんやろ」「どこから出てくるのやろ」というくらいしかないですね。特に、大きな恩恵を受けているとはとても思えない。

竹市 はい、井上さんの立場としては、あまり恩恵よりは被害のイメージのほうが大きいということでしたが、川端さんはいかがでしょう。愛知や東京など、故郷を離れておられた経験があると、抱くイメージも変わってくるのでしょうか。

川端 はい、今、綾部では、市街地を除いた所はすべて里山じゃないかなと思っております。それだけやっぱり自然が豊かで、住んでる皆さんの気持ちも非常に豊かだということところが里山の特徴じゃないかなと思います。

竹市 トレーシーさんはどうでしょうか。

トレーシー 日本の里山に関してしゃべりますね。世界は広いですから。季節感をしっかりと実感できて、空気のきれいさと水のおいしさと、基調講演で高木さんが本当に上手にまとめられたんですけど、田舎の情……都会とまったく違って人間の優しさと安心して暮らせる静かな落ち着いた所、という印象です。

竹市 中川さん、いかがでしょうか。

中川 私は「命が育つところ」だと思ってます。都会はほんとうは人の住むところではなくて、命というものは里山っていうか、自然との関わりのなかで育つべきだと思います。

最近、若い方に会いますと「どちらのご出身ですか?」と聞くようにしてしまってますね。「長野です」と答えが帰ってくる



と「すぐ長野県にお帰りください」と言うんです。その調子で、区役所の女性職員に尋ねたら「綾部です」「あんたすぐお帰んなさい」と言いましたら、来年の4

月に帰ってくるそうございまして、言ってみるもんだなと思ひまして。皆さんも、お子さんが東京にいらっしゃるかたは、即帰るように言ってください。

里山の魅力・里山の力について

竹市 はい、ありがとうございました。続きまして「里山の魅力や力」についてご意見を頂戴したいと思ひます。高木美保さんからもいろんな魅力、そしてまた提言もいただきましたが、「里山の魅力ってなんだろう」「里山の力ってなんだろう」、そんなお話に移りたいと思ひます。井上さんにとって、里山の魅力ってなんでしょう。

井上 そうですね。里山の魅力っていうより、里山に住んでいる人たちの魅力でしょうね。僕はずっと田舎に暮らしていて、九州とか北海道に出た時もやっぱり田舎ばかりですし、あまり都会で生活したことがないので、これが普通としか感じてないんですね。僕が暮らしているのは志賀郷なんですけれども、やっぱり住んでる人がみんな穏やかなんですわ。これはやっぱり自然の中でしっかり育まれているというか、「自分の力で生きてるんじゃない、自然の中で生かされている」ということを、それぞれが口にはしないけれども意識して感謝しているところが、やっぱりあるんじゃないかなって思ひますね。

竹市 先ほどの活動紹介の中では触れなかったんですが、井上さんは「コ宝ネット」という団体を主宰していて、都市からの移住、1ターンされてこられる方のいろんな支援をされてるんですが、その「コ宝」という名前にはどんな意味が込められているのでしょうか。

井上 コ宝っていうのは、まあ子宝のことなんですけどね。とりあえず田舎が元気になるには若い人に住んでもらわなあかんと。そして、田舎には空家がいっぱいあるやないかと。一方都会には、「豊かな

自然のなかで子育てしたい」「自分たちの食べるものぐらいは自分で作りたい」と考えている人や、「都会でこんな生活をしていていいんだろうか」と不安を感じている方もたくさんいらっしゃって、「よし、都会を捨てて出ていこう!」という人もやっぱりたくさんいらっしゃるわけです。そういう人たちに「ぜひ志賀郷に来てください」と、空家を世話する団体なんですけども、「定年過ぎた人はいないよ」と。「お年寄りには志賀郷には山ほど、もう宝の山のようにいるわけだから、若い人が欲しいんです」「子どもを育てている人たちに来てほしい」、そういう意味で「子宝」。でもここまで言っちゃちょっとトゲがあるんで、子はカタカナにしました。コミュニケーションの「コ」ですよとか、古民家とか子どもも含めて「コ宝」ってメンバーの一人が考えてくれました。

竹市 安心安全のための子育てを考えられておられる親御さんたちが集まってくる、それも里山の魅力なんではなかろうか。

井上 たぶんそうでしょうね。緑が豊かで、風がフーと吹いてもね、ビル風のようなムツとした熱風ではありませんからね。今年の夏も、エアコンなんかほとんど使わなくていいような生活ができるわけで





すから、そういうところにおいては非常に経済的でありがたいと思いますし、木々が生きているから、里山の木々や川や田んぼが熱を奪ってくれて、木の木陰を通して吹く風というのは特別に心地よくて、私らが感じるよりか町にお住いになったかたのほうが、感動していただけるんじゃないでしょうか。

中川 井上さん、年寄りも役に立つんですよ。私はね、60歳過ぎて、たくさん退職金もらって年金をもらっているかたに来てもらって、どんどんお金を使っていたきたいと考えています。田舎では80歳ぐらいまで活躍する場がたくさんありますから。生活費の心配がないので、いろんな地域活動をすべて手弁当でやっていただくのに安心します。

それから、やっぱり次の世代を育てるには、おじいちゃんおばあちゃんが一緒に住むことがとても大切です。お父さんお母さんたちも、いろんな意味で協力してもらえらるから助かるんじゃないかしら。なんかそういう形もあっていいかなと。是非、お年寄りも歓迎していただきたいと思います。

竹市 川端さんいかがでしょうか、里山の魅力。

川端 里山とって、深く考えたことはないんですけど、私も田畑を持ってはいるん

ですが、忙しくて田んぼの管理は人をお願いしていますし、畑も「どうされていますか？」って聞かれたら、「非常にきれいなグリーンになっております（笑）」と答えるしかない状態です。そんなことを知ってか知らずか、近所のおばちゃん達がキャベツ持ってきてくれたり、キュウリ持ってきてくれたりするんですよ。スーパー行ったら店員が「キュウリ持って帰れ」って言うてるなんて聞いたことないですけど、そんなんでやっぱり昔から「向こう三軒両隣」がうまくかみ合って生活が成り立ってんじゃないかな、というふうに思います。「困ったときにはお互いに助け合うんだ」という気持ちが、都会の人よりは数段上であるというふうに思っています。それが里山の魅力だろうというふうに思います。

竹市 はい、ありがとうございます。自然云々ではなくて人々の暮らし、コミュニケーション、思いやり、そんなところが魅力じゃないかという意見が続きました。では、トレーシーさん。

トレーシー 確かにね、今に出たお互いに助け合うというかね、やっぱり醤油がなくなったらすぐ隣りの人に借りに行くんですよ。

竹市 トレーシーさんの「お隣りさん」と言いますと……??



「困ったときにはお互いに助け合う」という
 気持ちが、都会よりも強い。

車を運転して、やっと最後のバス停を越えてから田舎の良さが生きてくる、しゃべりかけてくる、「お帰り！」みたいな感じで。自然と開うんじゃなくて自然とともに生きているような気持で。だから、何があっても日本に帰ってきました。



トレーシー 「隣り」と言っても結構歩かないとだめですけどね（笑）。隣の峰子さんていうおばちゃんがいるんですけど、とても世話になっていますよ。家を建てている間でも、お風呂が無いもんだから、「お風呂入りにおいでよ」って皆が声を掛けてくれるし、茶碗蒸し運んでもらったりとか、そのうちにご自宅まで食事に呼んでもらったりとかね、ほんとに田舎の情は温かいですよ。でもまあ、そうした話も22年前の話ですから。里山の魅力と22年前と今とでは、ずいぶん変わりましたからね。綾部に移住したときはコンビニも一つもないし、上林の道はクネクネ曲がりくねっていてね、ゆっくりゆっくり街中から45分くらいかかったんですね、家まで。今はもう、あんまりもう広すぎてトラックがバンバン走って、看板ばかり増えてね。だから22年の間に魅力もずいぶん変わってきましたね。さっきの高木さんの話でも田舎を「田舎」「少し田舎」「ド田舎」「とてもド田舎」の4つに分類されていましたが、かつては「ド田舎」か「とてもド田舎」でした。でも今は、「田舎」しか感じなくなってきているんですよ、残念ですけど。でもまあ、その田舎に私のすべてのライフワークがありますから。

3月11日の震災の様子を、カナダに帰ったときに映像で見ました。泣きながら吐きながらみたいな感じで。家族や友人たちから「日本には帰るな」と言われたんですよ。まあ原発事故の影響で放射線のことでも心配で、「放射線浴びに行くようなもんですよ」とか。でもそんなわけにはいかない、ここは私の故郷でしょ。私は旅行から帰ってきて、自分の玄関に入った途端に落ち着くんですよ。自分で

竹市 実は、このシンポジウム始まる前に、パネリストの皆さんと、それから山崎市長、京都府中丹広域振興局の木村局長、みんな簡単な打ち合わせをした時も、東日本大震災は、ひとつの大きなターニングポイントになったんじゃないかという話が出ました。「戦後日本が、物質的豊かさと引き換えに、失ってしまったものがあるんじゃないだろうか」「失ってしまった大切な何かが、里山には残っているんじゃないだろうか」と多くの人が薄々感じていても、それを大きな声で訴えたり行動に移したりという人は少なかった。それが東日本大震災をきっかけに、そうした意見や活動が一般化してきたんじゃないか、そんな話も出ておりました。またこの話も後半、里山の活用の仕方が出てくると思います。では、中川さんにとってどうでしょう、里山というのは。

中川 私は、「豊かに暮らせる」ことが里山の魅力だと思っています。奥上林に宿を持って、そこに行くたびに、水の流れる音、風のそよぐ音、そして空気の美しさ、こういうものが、皆様にとっては当たり前なのかもしれませんが、私たちにとっては宝物のようなところですよ。昨日、「あやべ吉水」のスタッフがお嫁さんをもらいました。それで、昨日、一昨日とお嫁さんをもらう本人がですね、自分の披露宴のために毎晩、毎晩お料理を作っていました。私も一緒に作ったんで



花婿さんの家で、自分たちで作った料理で披露宴を祝う。



すけどね。そして昨日は、彼に着物と袴を着せてあげて、それからお嫁さんにも花嫁衣裳を着せてあげて。これはですね、昔はみなさんそういう形で花嫁さんを迎えて、自分の家でご飯を食べていたことが普通だったわけですね。これが「ちょっと前の日本の暮らし」では当たり前前の光景だったと思うんです。その後、少し小雨だったんですけども坂尾呂神社までみんなで歩いて、そしてそこで近くの神社の神主さんにおいでいただいて、祝詞をあげていただきました。近所の人たちも一緒に参列していただきましたけど、ほんとうに感動しました。森の中で、神様がそこにいるという神社でみんなで心から、これからの人生をどうしていくかという祝いの宴をしたんですけれども、これが普通の光景だったと思うんです。

その少し前に、東京のホテルで同じように、やはりご活動をしている若者が結婚したんですが、これが大変ですよ。ビルの上階層、35階から見ると都会が一望できて、出てくるお料理は私なんか食べられるものが出てこないんですね。それで花婿さんが自分で料理を作って自分で宴を祝うなんていうことは、まずめったに今の世の中ではないんですよ。これができるのは里山である綾部の奥上林だからこそできると思ひまして、本当に素晴らしい人生の出発をしたと思ひます。それは皆様も、おじいちゃんおばあちゃん達はそういう出発をされたと思う

ので、是非そういう環境を大事にされてほしいですね。くれぐれもホテルだとか、まあホテルもたまには行ったらいいですけども、できれば本当におうちで冠婚葬祭をされるような、そういう里山の生活を大切にしていきたいと思ひます。

竹市 ありがとうございます。井上さんから、先ほどの活動紹介の中で、トントン馬車ですか。「ここだけの話、違反です」とポツリとつぶやかれたんですけれども、今の中川さんのお話なんかをうかがっていても、都会のライフスタイルや規範といったものが、何かこう、里山生活の対極に見え隠れするんですが……。井上さん、そうした里山に即していない法規制について、いろいろご意見をお持ちのようですが、いかがでしょうか。たとえば、「かかりつけ米農家」の前身である活動をスタートされたときは、まだお米の直売が許可されていなかった頃だったと思ひますが。

井上 そうですね。食管法（食糧管理法）というのがしっかりしておりまして、自分でお米を個人売買してはいけないという法律があったんです。でも僕は、「自分で作ったものを自分で売ってどこが悪いんだろう」と考え、直売に踏み切りました。農家が苦しいのは、中間搾取のされ過ぎ、何を見たって取られて取られて取られてばかりでないか。そういう仕組みをなくしたい、自分で作ったものは自分で売る。そうしないと日本の農家はいつまでたっても補助金にすがりつくばかりになるという考えが、今も僕のなかにあります。これは変えないといけない。僕の世代に少しでも変えたいという思ひがあって、人に



値段をつけてもらって買っていただくというのはとんでもない話だと思ひます。これを当たり前だと思っ



ていること自体がみんな異常だと思ひまして、自分で作ったものは自分で売るということで直売をスタートした、それが違法でした。

竹市 綾部でも手作り市の火付け役としてたいへん注目されている三土市は、いかがですか？ いろいろな許認可の手続きなど

で大変だと思うんですが。

井上 衛生面やら通行規制やら、モメにモメて……いろいろありますし……何をしても難しいですね。そうした弊害を改善していこうと思うと、悪いんですけども、もう堂々と破っていくしかないんじゃないかと。いくら署名を集めたとか誰々さんをお願いしたとか言っただって、何の進展もありません。そのうちに自分の寿命がなくなりますね。これはやはり改善すべき点で、本当におかしい。「地域のためにこうしたいけれど、これが弊害になっている。こうこう、こういう理由だからこの条例は良くないですよ。改正してくださいよ。それまで僕は自分流でやり続けますから、さよなら」って言うぐらいで、やはりけんかを打つぐらいの馬力がないと、世の中変わらないというふうに感じています。

綾部市は、これから、 どのように里山を活用していくべきか

竹市 もうひとつ井上さんに質問なんですけれど、コ宝ネットで1ターン者を受け入れる活動において、例えば、よく問題になるのが1ターン希望者は山ほどいる。しかしこちらの古民家の供給といえますか紹介が追いついてない。こうしたズレにどのように対応しておられますか？

井上 そうですね。組織的には地元を拠点としたコ宝ネットがあって、空き家情報はたくさんあるんですけど、最終的には家を持っている人と住みたいと思っている人とのマッチングが重要だと思うんですよ。やはり家を持っている人に「その人」を紹介する、「この人なんだ。この子どもを持ったこの人が家を探しておられるんですけど、いい感じのご家族でしょ？」と。そうすれば家の持ち主も、「いい感じのご家族ですねと、そうですか。それなら前向きに考えてみましょう」と、まあ言ったら一本釣りだと思うんです。組織がどれだけしっかりしていようとどれだけたくさんの情報が集められようとも、それはそれだけのもので……どういふんでしょうね、血が流れていないとい

うか、紙に書いた情報に過ぎないと思うんです。要は一人と一人の話がどこまでできるか、どれだけの思いがあるか、そこが重要だと思うんです。紹介されたほうも「この人だったら……」という思い、受け入れる側も「この人だったら田舎にすぐになじめそうだ」「この人の子どもたちが来てくれたら、小学校の複式学級の問題もすぐに解決される」「夫婦ともに、考え方が田舎で子育てをしたいだとか、自分たちの食べるものは自分で作りたいたいと思っているんだな」とか、生き方というものがはっきりしているような人たちだと安心しますね。

20年とか10年ほど前までは、家を売ると「お金に困っていた」と噂されるんじゃないとか、「お盆と正月にお墓参りに帰るにはやっぱり家がない」とかで空き家を手放したまらない時代が続きました。でも最近は「息子が町に家を建てた、田舎には帰ってこない。この家を私の代で処理をしておかないと……。子どもたちに負担をかけてはいけない」との思いのかたもたくさんいらっしゃいます。そうした動きのなかで心配なのは、空き家

「地域のためになる人が来るなら一肌脱ごう」 という「粹」。



定住促進課が主催の古民家見学ツアー

を不動産屋などに売ってしまうと、転入してきて、村付き合いもまともにせずに、あいさつもしない、ゴミは勝手に放り出す、草は刈らない、雪は積もり放題……とかですね。あるいは、別荘代わりに使われる、夜にワイワイ騒いだけでゴミだけ置いて帰っていくというような、村とのゴタゴタを起こすような人に入ってもらったら困る、という思いが家主の方にはあります。家主の本音としては、たまに故郷に帰ってきたときに、「お前とこの家に入ってもらって良かったなあ。見てくれお前、子どもは3人目が生まれたぞ、村の中でもうまくやってくれているし、いい人に住んでもらった」と、家を譲った人はたぶんそう言ってほしいと思うんですよね。「地域のためになる人が来るなら一肌脱ごう」「よし分かった。この人なら住んでもらおう」ということが、粹ですね。値段は本当に安くお世話くださる人もありますし、古民家を持っておられるかたは、一言で言うと「粹」、これしかないですね。くどいようですけども、「こういう人が、住みたがっているんです」と実際に会ってもらって「この人となら!!」と同調してもらったら、話はうまく進んでいくように思いますね。

竹市 徐々に話題が、3つ目の議題、「綾部市は、これから、どのように里山を活用していくべきか」に徐々に移ってきましたが、

井上さんのご意見は、行政の規定とか法律とかですね、その辺の対応を待っているよりもとにかく前に進もうということで、Iターン者とのマッチングにおいても、「独断と偏見」とまでは言いませんが、「子ども」「子育て」の世代を優先しているというお話でした。

川端さん、上林地区ではどうでしょうか。綾部市さんですね、定住促進課のかたからいろいろご紹介があったり、古民家の見学ツアーが実施されたりするようですが……？

川端 ええ、定住促進課のかたが、かなり活発に事業を展開されておるようですけども、やっぱりこれは地元とうまく話が合わないとなかなか難しいだろうと思いますね。過去の経験からいって、平成12年にむさくさ会が立ち上がり、その会員の皆さんの、かなりの方々が、口上林に定住されたという実績があります。というのは、やはりそういった会のイベントを通じて交流が深まって、その土地の魅力というのが発見できた。また、まったく知らない人ばかりの所に入ってくるとなると多少不安もあるだろうけれども、地元会員の皆さんがそういったところをうまくリードされたんじゃないかなというふうに思っております。

ですから、そういったことも含めて、我々ができることは我々でしかないといけません。もう一つ言えるのは、今日明日の話ではなく、冒頭の紹介にもありま



したが、「綾部かんばやしの里体験推進協議会」っていう長ったらしい名前がありますが、これ、我々は「子どもプロジェクト」と呼んでおります。都市から子どもたちを呼んでですね、上林、いわゆる田舎の良さを体験してもらおうということで、これからも事業を展開しています。年間に100人来てくれるのか200人来てくれるのか分かりませんが、その中の一人でも二人でも、大きくなってここで生活してみようという子どもたちが出てきたらいいかなと。それも一つの狙いでありまして、この前の福島の子たちなんかでもですね、民泊した家に「非常にいい経験をさせてもらったと、是非また行きたい」という手紙や電話が寄せられる……といった話も聞いております。ですから、それだけ上林もいいところなんだよ、ということをもっともっと、子どもたちから、定年を迎えて資産がしっかりある人にまで、一人でも多くの人にPRをして、実際に上林に来ていただきたいというのが私の願いであり、これから活動していかないといけないポイントだろうというふうに思っております。

竹市 はい、ありがとうございました。小さな交流を重ねていくと、そのなかで地域のかたが「里山の魅力」に自信を取り戻す、それを見直す、そんなきっかけになるんじゃないかというお話でしたが、トレーシーさんはどうでしょう。里山を今後どのようにしていったらいいかなど、ご提案などありましたら。

トレーシー まずは自然を守ること。何よりも命をつなぐ場でありまして、多様な生態系が営まれる場でもあるはずなのに、生活していく上で当たり前の環境が汚染された現状が今、あります。先ほどの話にもありましたが、福島から受け入れられた子どもたちのなかにも、仮設住宅に住んでいる子どもたちもいるとか。

竹市 特に原発事故の影響で、屋外で遊べないということになりましたので、せめて夏休みぐらい屋外で遊ばせようということで受け入れを実施されたんですよね。

トレーシー 今のお話を聞いただけでも胸がワーンときますね。私の家も、原発がある若狭湾から10キロメートル圏内にあり、先ほど話したように、親類や知人の反対を押し切って、この夏、カナダから帰ってきましたけれど、今までの何百倍もの不安を抱えながら住んでおりますし、やはり里山を守るにしても自然と食べ物、自分たちの食べ物を守るというのは一番大事です。

基調講演で高木さんも話しておられたように、3月11日以降、ずいぶんこの問題は話し合われていますが、日本人は新エネルギーのノウハウを絶対に持っている、その活用を私たち日本に住んでいる人たちが大きな声で言わないとだめですね。そのために私は、カナダから日本に帰ってきたのかも分からないんですけどね。里山・綾部に住む、農業をやっている人たちこそ、そういう声を出してほしいですね。綾部こそ、先祖代々からの、こじんまりした自然を大事にしてる場所なので、もっとそういう声を聞きたいですね。

竹市 はい、ありがとうございます。綾部には本日パネリストとしてご登壇いただいているかた以外にも、こうした活動を展開されて



昔あった技術や発想を見直して、
里山の良さを守りながら暮らしていく。



里山の魅力を生かした体験や「綾部里山交流大学」など多彩な活動を展開する「里山ねっと・あやべ」

いるかたがたくさんいらっしゃいます。「里山ねっと・あやべ」をはじめ、実際にいろいろと活動している団体もあるのですが、そういった活動を、より発信力のある形にしていくにはどうしたらよいか、中川さん、そのあたりはどうでしょうか。発信していく方法は。

中川 里山の綾部にいらっしゃるかたは、ご自分の住まわれている環境がどれほど素晴らしいかということに、逆に気がついていらっしゃらないかたが多いかと思います。本当に自然がそばにあるということの豊かさというんですか、これは暮らしていくための命をつないでいくための条件が全部そろっているわけなんですね。ところが、この美しい里山の村に、例えばですね、福島県の飯舘村のように、ある日突然「ここに住んではいけない」と言われたら、皆さん、どうされるのでしょうか。私も昨日、奥上林に来たんですが、もしも突然に「もうここに帰ってきてはいけません」と言われたら、一体どういうことになるんだろうと考えましたね。でもこれは今、日本中の美しい里山を持っている所に共通した課題なんですね。「自分の住んでいる場所だけは大丈夫だ」と

言い切れないような状況なんです。飯舘村と私との関係といいますのは、築地本願寺の朝市に農家さんが出店して下さってまして、そのお一人が毎月いらしていたのに突然来られなくなった。聞けば、8千人いた村の人が全員、村を出ないといけなくなり散り散りバラバラになってしまった。で、どうなったかというと、草はぼうぼう、牛はその辺を歩いている、野生動物は歩いている。本当に美しかった村がいつべんに廃墟となったわけです。この間、「死の町」という発言で大臣を辞められたかたがおられましたが、実際は本当にその言葉どおりなんです。ですから今、奥上林といわず上林地区、志賀郷全部がそういう問題に直面しているわけなんですね。いつそうなるか分からない状態なんです。

そういう意味からも、私たちは今、「里山を守っていく」という問題を考えるとき、エネルギーの問題についても考えるべきです。毎日、当たり前のように、好きなだけ電気を使って暮らしていますけれども、この考え方から脱出しない限り里山を守っていくことはできないんです。私ごとになりますけれども、震災後、2度ドイツに行きましたが、ドイツはこんなに電気を使っていません。そういう市民生活が根付いているんですね。ですから、私たちは政府や行政にあれこれ要求する前に自分たちの暮らしのなかで、いかに贅沢しているのか見つめ直し、暮らしを変えていくことが大切だと思っています。自分たちが電気に頼りすぎない暮らし、それをもう一度呼び起こすための条件が綾部にはあるんです。豊かな里山の恵みや安心安全な日々の暮らしを守っていく仕組みを考え、それを支えるエネルギー政策と合わせて、ぜひ綾部から発信して、国をリードしていけないだろうかということ、実はずっと考えています。それには、綾部市は、ちょうどいいサイズの市ではないかと思えますし、また、たくさん守らなければならない里山があります。そして食べ物があります。今日は市長さんもいらっしゃいますので、新しい仕組みづくりを、ぜひ綾部で実践していただきたいと。それには、「ちょっと前の日本」にあった知恵を呼び起こせ



ばいいと思います。新技術を開発するというよりは昔あった技術や発想を見直して、里山の良さを守りながら暮らしていくエネルギー政策を綾部で作っていただきたいと切に思います。そうしましたら世界中から注目を浴びますし、経済も豊かになるかと思っています。

竹市 パネリストの皆さんに様々なご意見を頂戴したなかで、いくつか気になる言葉がありました。ひとつは「不便さ」。トレーシーさんが「22年前と比べた、今の不便さ」について述べられた通り、「不便さは、決して否定的な要因ではないんじゃないか」という気がしてまいりました。また、中川さんからありましたように、「高度成長やバブル期などで当たり前になってしまった私たちの暮らしのあり方を見直す、変えていく」とか、あるいは井上さんのおっしゃられた「時代や社会にそぐわなくなってきた法規制」ですね。それらの改正を待っているんじゃなくてぶち壊していくぐらいの積極性が必要だというようなアグレッシブなご意見も、大きな示唆を秘めているように感じました。では、そろそろまとめに入りたいと思うんですけども、この綾部は、いろいろな可能性を秘めた方々が活躍しておられます。そうした活動や情報発信は、日本

全体の経済や社会のしくみ、あるいは市民レベルの、一人一人の意識に大きく影響を及ぼしていく可能性を秘めています。実はそうした、影響力のある声を挙げていく第1号、第1歩を綾部市がしていくべきではないかと、そのような意見だったと思います。そこで、そうした先進的な取り組みをされている皆さん、また里山を守ってこられた自治会や地域の皆さん、あるいはもっと大勢いらっしゃいます。そうした活動や提言を外に向けて発信していくよう綾部市さんに働きかけていくと、こんなことで今日のパネルディスカッションのまとめとしたいと思います。

司会 どうもありがとうございました。自分たちの当たり前のような生活なんですけれど、あらためて見直していきたいなと感じさせていただきました。そして、この綾部には美しい里山の文化というものがしっかりと根付いております。地元に住んでいらっしゃる方だけではなくて、外から、綾部の魅力にひかれてこられました、Iターン、Uターンをされましたとか都会の人たちがいらっしゃる中で、温かい懐の大きさを受け入れてくださっている方たちとの交流というのも、これからも深めていただきたいなと感じました。



綾部の里山文化は日本全体の経済や社会のしくみ、あるいは市民レベルの、一人一人の意識に大きく影響を及ぼしていく可能性を秘めている。

閉会挨拶



パネリストによる意見交換の後、急速、会場との質疑応答を取り入れるなどで、予定時間を超過してパネルディスカッションが終了、第26回国民文化祭綾部市実行委員会副会長、田所卓・綾部市文化協会会長による閉会挨拶へと進みました。

司会 会場の皆様、壇上のパネリストの皆様も貴重なご意見をいただきましてありがとうございました。それではお時間も迫ってまいりましたので、本日のシンポジウム閉会にあたりまして、主催者を代表し、第26回国民文化祭綾部市実行委員会副会長、田所卓・綾部市文化協会会長より閉会のご挨拶とそして里山文化宣言を申し上げます。どうぞよろしく願いいたします。

田所 ご紹介いただきました副会長の田所でございます。今の感動といいますか、興奮が冷めやらないかもしれませんが、終わりにあたりましてご挨拶を申し上げたいと思います。本日は長時間にわたりましてシンポジウムにご参加いただき、ありがとうございました。里山の魅力を改めて感じていただけるシンポジウムだったのではないかと思います。基調講演をいただいた高木美保さま、お田植え式をご

披露いただきました綾部八幡宮お田植え式保存会の皆様、ほんとうにありがとうございました。また、パネルディスカッションにパネリストとして参加いただきました井上さま、川端さま、トレーシーさま、中川さま、また皆様の意見を上手くまとめていただきましたコーディネーターの竹市さま、本当にありがとうございました。

さて、本日のシンポジウムは10月29日から9日間にわたって京都府内全26市町村において展開されてきました、「第26回国民文化祭・京都2011」を締めくくるイベントとして開催いたしました。「戦後、日本は、物質的豊かさと経済的豊かさを実現したが、その半面、大切なものを失ってしまったのではないか」といった議論を、ここ数年、よく耳にするようになりました。物質的豊かさと引き換えに日本人が失ってしまった大切なものとは何か……それを考えるに当たっ

て、とても重要なヒントを秘めているのが「里山の暮らし」であり「里山の文化」ではないのか。との思いで、この2年間、準備を進めてまいりました。

特に綾部は、歴史的に「京の都」という一大消費地をひかえ、農産物をはじめ黒谷和紙、炭や薪といった燃料などを供給し、都の生活と文化を支える「都の鄙（ひな）」の役割を担ってきました。それだけに、「里山文化」を考えるにふさわしい所ではなかったでしょうか。

今こうしてシンポジウムを終え、私自身、改めて里山に秘められた力を認識するとともに、里山文化の大切さを発信していく役割を、ここ綾部が担っているのではないかという思いを強く抱きました。そこで、本日のシンポジウムの締めくくりといたしまして、ここで「里山文化宣言」を提唱させていただきます。

里山文化宣言

里山はかつて、人々の暮らしに不可欠な環境でした。集落、人の手が入った森林、農地などで構成され、日本人は長年この里山で暮らし、生態系の一部となり、今で言う、持続可能なライフスタイルを実現していました。そして、人々の営みと自然とが融合・調和するなか、里山には独特の文化がはぐくまれてきました。

里山はまた、私たちが心に思い描く「ふるさと」の情景でもあります。自然と人間が出合い共生する姿勢が、日本の四季を愛で、自然になじむ文化を生み出したといわれますが、これも里山のような原風景を持っていることが大きな要因であり、日本の文化や伝統、そして私たちの生活習慣を形成するのに、里山はとても重要な役割を担ってきたのです。

しかしながら、戦後の急速なライフスタイル・産業構造の変化等により、里山は失われつつあります。森林は荒れ果て、里山文化を知る方々は高齢化し、文化の継承は待たなしの危機的状況にあります。その一方で、都市部から里山の魅力を求めて多くの人々が訪れるようになり、里山の恩恵を享受するのはそこに暮らす住民だけではなくなってきました。里山に魅せられ、移り住む人たちも増えてき

ています。

思えば、里山の豊かな美しい景観を守り、独特の文化を培ってきたのは、そこに暮らす人々の連綿とした生活の営みでした。都会では失われつつあるコミュニティの力でした。今、私たちは、里山を守り伝えてきた人たちの功績を再認識し感謝するとともに、求められている「地域再生」を実現するヒントを秘めた里山の魅力・文化を守り、未来に伝えていくことを誓います。

平成23年11月6日

第26回国民文化祭綾部市実行委員会

司会 田所さま、どうもありがとうございました。そして、パネリストの井上さま、川端さま、トレーシーさま、中川さま、そしてコーディネートいただきました竹市さまに、どうぞ今一度大きな拍手をお送りください。本当にありがとうございました。さあそれでは皆さま、以上を持ちましてシンポジウム里山を終了とさせていただきますが、この後引き続きましてお楽しみ抽選会へと移らせていただきます。どうぞ、皆様、ご参加ください。また、屋外では京都国民文化祭で築かれた文化の灯火を次世代へともし続け、また東日本大震災の復興への祈りを込めて、由良川、里山、心の灯ろうを展開いたします。灯ろうを由良川の延長146キロにちなんで、146個並べ、綾部里山合唱団の有志の皆様の歌で、ご来場いただきました皆様に心をこめてお見送りをいたします。ぜひご観賞いただきますようお願いいたします。

